

1 はじめに

本校は、基本的な生活習慣が確立していない児童が多く、学校での学習規律や家庭での学習習慣に大きな課題があった。加えて、生徒指導上の課題もあつたことから、学校における学習規律や家庭における学習習慣など生活習慣力を身に付けさせたり、学習の中で人間関係力をつけていたりすること、児童一人一人にいわゆる「生活力」を高める必要があつた。

また、全国学力・学習状況調査の結果分析からは、基礎・基本となる学習内容の定着が十分でなく、「基礎学力」の向上が課題となつていた。

2 取組

そこで、児童一人一人の生活力・学力を高める取組を教職員が一丸となり、数年間にわたり家庭・地域と連携をしながら進めてきた。

(1) 生活力の向上を目指して

○生活力実態調査
学校や家庭での生活・学習習慣についての実態調査を年2回実施し、



くつの整頓

倉敷市立第一福田小学校

教職員の協働と家庭・地域との連携による生活力・基礎学力の向上を目指した取組

取組に対する成果と課題を検証する。
○生活リズム表と頑張りカード

生活リズム強化週間を設定し、「生活リズム表」と「いきいきがんばりカード」で保護者の協力を得ながら、生活・学習習慣の確立に対する意識の向上や継続化を図ってきた。

○家庭学習の習慣化

P T A と連携して家庭での学習習慣の定着を図るため、家庭学習ですること、学習時間・睡眠時間の目安学習のポイントを家庭学習の手引きとして知らせ、生活及び学習習慣の確立への協力依頼を行った。

○全職員で徹底した生活指導

あいさつ・そうじ・廊下歩行の三本柱に加え、「くつの整頓」に全職員の共通理解と協力のもと取り組んだ。「徹底」を合言葉に、一つのことを徹底してできるようにしていき、そして、次に次にできることを一つ一つ積み重ねていった（凡事徹底）。

○集団づくり・人間関係づくり

学級の集団づくりでは、学年初めの学級の実態に応じた取組を進め、中間期に成果と課題を明確にし、学年末に向けて改善を図っていった。縦割り班を中心とした異年齢集団の人間関係づくりでは、年間活動計画に基づき、高学年は、思いやりの気持ちとリーダー性を高めること、低学年は、尊敬と感謝の気持ちを深めることを目標に、なかよし集会を年10回（1単位時間）実施している。

(2) 学力の向上を目指して

校内研究を進めるとともに学習基盤の確立を図るための学習規律の徹底や補充学習の充実に取り組んだ。

○基礎学力の向上

- ・ 計算タイム（朝学習）
 - ・ 放課後学習教室（週1回）
 - ・ 少人数指導（3・4年算数）
- 学習規律の徹底
- ・ 姿勢、話し方聞き方のルール等
- 授業が基本（授業改善を図る）
- ・ 25年度授業力アップ支援事業（市）

・ 26年度授業改革推進事業（県）

3 成果と課題

数年間にわたり取り組んできた成果が徐々に表れ、学校における学習規律が定着し、規範意識の高まりがみられ、落ち着いた学校となつている。家庭における生活習慣や学習習慣の定着もみられたしているが、まだ十分ではない。

基礎学力の向上については、まだまだ課題がある。

4 今後の更なる取組の充実

(1) 基礎学力の向上

授業改革推進リーダーの指導・助言をもとに、家庭学習や補充学習の内容や取り組み方を改善し進めていく。また、「授業が基本」のもと、授業の質を高めるよう授業改善に引き続き努めたい。

(2) 豊かな心の育成

学校生活において自己存在感や自己実現の喜びを味わうことのできる学習活動を多く設定し、教育活動の充実を更に図っていききたい。

(3) 家庭・地域との更なる連携

子どもたちの笑顔と「よい学校になつている。」という地域の声を励みに、更によい学校を目指し、家庭・地域と連携して取り組んでいきたい。（校長 有森修）

学力向上に向けた、 日常授業の改善

凡事徹底による

笠岡市立大井小学校

1 はじめに

全国学力・学習状況調査や本校で行っている総合学力調査結果から、本校の子どもの学力や学習習慣等の課題が明らかになった。

子どもたちに確かな学力をつけさせるためには、教室で毎日行われる一時間一時間の授業を充実させることが重要と考え、「学習の約束」や「学び方5（ファイブ）」に基づき、学習規律の徹底とICTを活用した「分かる」授業により日常授業の改善を図った。

また、子どもたちに豊かな人間力を育むため、地域と連携した学習プログラムを充実させる取組を行った。以下、本校の取組を紹介したい。

2 取組の概要

(1) 「学習規律の徹底」

日常の授業を支える基盤として学習規律が重要であると考え、4月の学級開きからどの学級どの教師でも同じスタンスで指導できるように、「学習の約束」として学習規律について共通理解をし、徹底を図った。具体としては、

「授業が終わったらすぐに次の時間の準備をし、その後休憩」

「ノートを中心に、教科書は左側、筆記用具は必要なものだけを用意(教室に写真を掲示)」「ノートの使い方も教職員間で共通理解し、どの学級でも同じ指導」などが挙げられる。

(2) ICT活用による

「わかる・できる」授業

子どもの学力向上に向け、まずは「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を重視し、環境整備の進んでいるICTを活用して、日常授業の改善を図った。

「実物投影機」「プロジェクタ」「マブネットスクリーン」を常設化することにより、スイッチを押すだけで、簡単に教科書等を大きく映して指導することができるようになっている。教科指導で、まずは「大きく映して」明確な説明・指示を行うことで授業



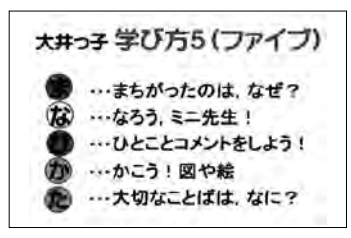
は分かりやすく変化した。

また、教室のPCに整備されているフラッシュ型教材やデジタル教科書、共有化しているデジタル教材など、多くの有用な教材を担任が授業のねらいに応じて選択し、どの学級でも活用している。

また、授業改善を目指した校内研修や研究授業では、経験豊富な教員が若い教員をサポートする体制を整え、校内全体の授業力の向上を図った。

(3) 「学び方5」の活用

子どもたちが学習に活用できる学習方略として、「まちがいがいから学ぶ」「説明してみる」「ひとことコメントを書く」「図や絵にかいて考える」「キーボードを見つめる」の五つを選び、「大井っ子学び方5」として共通理解を図った。子どもたちには、掲示物で内容を知らせ、毎日の授業や家庭学習で活用できるように指導した。



「4」の実施

授業外学習ポイント制度として「いきいき大井っ子ポイントラリー」を開始して3年が経過した。地域における小学生向けの教育プログラムを洗い出し、諸機関に協力依頼を行い、子どもたちや保護者には、活動の趣旨やプログラムを紹介する通信やポイントラリーカード・記録カードを配付して参加を呼びかけた。

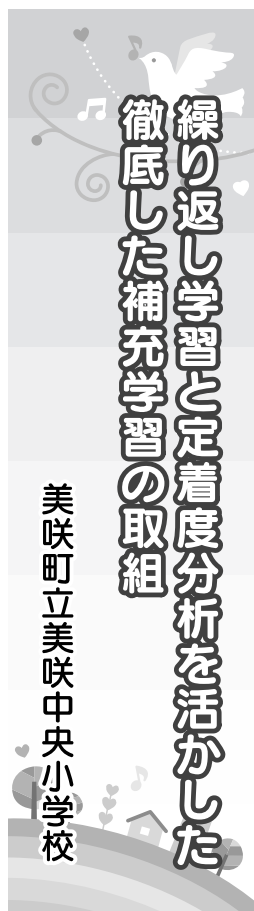
地域連携通信や壁新聞、学校HPで活動の様子を紹介したり、ポイント認定を行ったりして、参加意欲の向上につなげた。

3 おわりに

本校は、3年間、研究テーマ「確かな学力と豊かな人間力を備えた」においてがんばりおおいにのびる「子どもの育成」、サブテーマを、「教えて考えさせる授業」の実践と地域連携を通してと設定し校内研究に取り組んできた。これらを通して、少しずつではあるが、子どもの学力の伸びや学習習慣の改善が確認できている。

今後、児童数の減少やそれに伴う学級数の減少など、今まで積み上げてきたものを維持していくことが困難な状況が予想される。「凡事徹底」を合い言葉に、当たり前のことが当たり前にできるよう、これからも大井小全体(チーム大井)で日々の実践を充実させていきたい。

(校長 妹尾 和正)



1 はじめに

本校は、全校児童191名、各学年単級の小規模校である。地域柄、学習塾等の利用はほとんど無く、家庭学習は、学校の用意する宿題だけという現状であり、平日の家庭学習時間も、宿題の量で決まってくる。学力の向上は、すべて学校における取組次第という地区である。

全国学力・学習状況調査及び県学力調査では、活用問題ばかりでなく、基礎問題の定着にも課題があった。

2 教職員協働の取組の開始

まずは、全国学力・学習状況調査結果を分析し、本校での対策の基本方針を定めることにした。全国や県の平均正答率を指標にして、本校児童の結果から具体的な分析を心がけ、今まで感覚的にしか捉えていなかった本校児童の弱点を明確に職員で共

有した。もちろん、難易度の高い問題ばかりでなく、容易に修正可能な基礎問題でのつまずきや誤答傾向を丁寧分析することも大切にした。そこで、単年度で結果を出すべき『短期目標』と、経年的に校内研修を通して改善すべき『中・長期目標』の二つを、教職員で共通理解することから始めた。

『短期目標』とは、ズバリ、全国学テの平均正答率アップを狙うもの。年度の全国学テ及び県学テの本校平均正答率を全国平均以上にしようというものだ。特に、基礎のA問題に関しては、確実に目標達成できるように、徹底した繰り返し学習を行うこととした。そのための時間の確保として、朝、8時10分からの『朝学習』を設定。全担任が指導に入り、15分間の徹底した復習プリント指導を行うために職員朝礼を廃止した。

もちろん、5年生には、全国学テの過去問も授業で扱ったり、宿題として何度も取り組ませ、問題への慣れと確認の機会を確保した。

これらのプリントは、担任以外の職員が常に大量に印刷して、いつでも使えるように、学年のワークスペースのプリント棚に補充するようにした。児童の実施したプリントは、担任以外の職員で採点・分析し、担任にフィードバックし、担任から児童への指導がなされる仕組みが出来上がってきた。



朝学習の様子

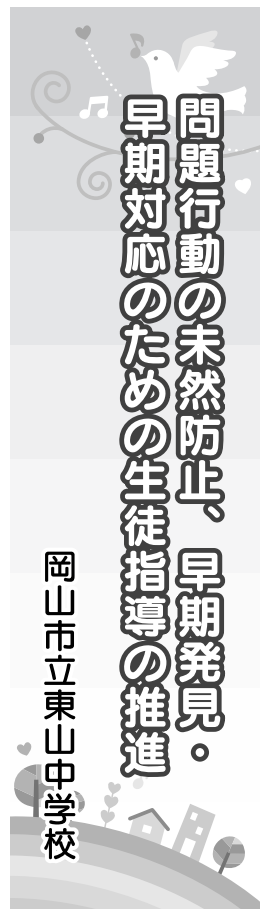
『中・長期目標』は、日本語で読み、考え、語れる児童の力の育成を

目指した日々の授業改善なくしては達成できないと考えた。国語だけでなく、算数でも理科でも、すべての力の源は、日本語を駆使できる力に他ならない。日々の授業で、正しい言葉の力を付けるべく、発問や指示に至るまで精査するよう校内研修を進めている。

3 おわりに

到達度確認テストなど、具体的な問題に取り組ませることで、児童も教職員も、学習の定着度を具体的に把握できるようになり、補充指導のポイントも明確になった。正確な分析により、本当に必要な個別指導を行うことができるということを、教職員全体で確認できたのが最も大きな成果だと考えている。授業改善においても、「何をどう修正するのか」、常に点検と分析を行いながら、校内研修を通して、授業改善に励んでいくよう、お互いの課題となる部分を共通理解している。

(前年度校長 片山 一生)



問題行動の未然防止、早期発見。 早期対応のための生徒指導の推進

岡山市立東山中学校

1 はじめに

東山中学校区では、岡山市立の2保育園、2幼稚園、2小学校、また中学校区内にある県立成徳学校に設置されている岡山市立緑ヶ丘中学校・平井小学校分教室及び本校で、東山中学校区地域協働学校連絡会を組織し、地域や保護者の方々のご支援・ご協力を得て、連携を図り学校園づくりを進めている。

学区内及び近隣に国立大学附属中学校、入学者選抜のある県立や市立中学校、複数の私立中学校があり、学区内児童が他の中学校に進学する割合が高い。また他校への進学がかなわず、意に反して本校に入学してくる生徒も少なくない。

さらに、精神的にも生活面でも厳しい状況に置かれている生徒、それらに起因して将来への展望がなかなか描けない生徒もいる。

こうしたことから、多くの生徒が自分への自信や有用感を持っていない

い現状があることが、本校の課題である。

2 他者受容感、自己肯定感・自己有用感の醸成を旨として

多くの課題の克服は、本校の『めざす教職員像』に示された、

- 生徒に寄り添い、生徒の良さを見つけ伸ばす教職員
- 生徒や保護者、地域に信頼される教職員

の二つを建前ではなく、学校を挙げて目指すことができるかどうかにかかっていると考えている。

これによって、生徒たちにとって学校は居心地の良い場所となり、「他者から受け入れられている」、「自分はダメな人間じゃない」、「わかってくれる大人がいる」、「この人の言う事は聴こう」、「仲間を裏切らない」、「他者を尊重する」、「人の役に立ちたい」等の気持ちが育まれていくと思っている。

義務教育最終年である中学3年生の巣立ち、これは学区内保幼小中の一貫した取組の集大成であり、地域の方々のご支援等も重要な要因となっている。

本校は特別の何かをやつていこうとするのではなく、人権教育的視点を学校生活の全ての場面に取り入れた日々の実践を、粘り強く続けていくことが最も大切であると考えている。そのことが、保護者・地域・他校園・関係諸機関等から信頼していただける学校であることにつながると思っている。

3 成果と今後に向けて

3年生対象の平成26年度全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」では、「学校に行くのが楽しいと思えますか」の肯定的意見が92・9%であった。「先生はあなたのおいところを認めてくれていると思えますか」が87・9%と全国平均を14ポイント近く上回っていた。また、3年生の本校独自の学校評価アンケートでは「先生方は良いことはきちんと評価してほしい」と思っていますか」に「先生方は良いことはきちんと評価し、悪いことはきちんと正してくれると思いますか」については、保護者の96・7%、生徒の91・8%、「先生方は、子どもた

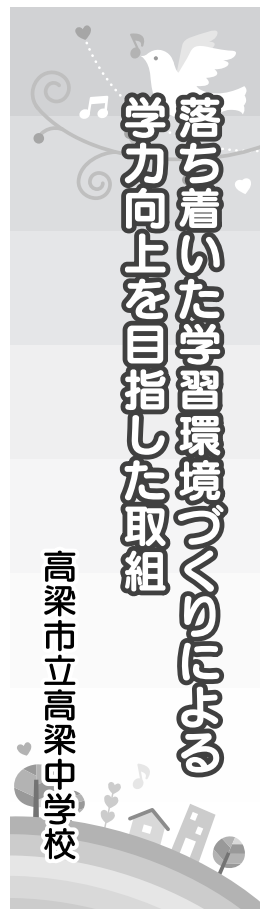


学区内での生徒会主催ユニセフ募金ボランティア活動

ち（私たち）の意見や悩みをよく聞いて、一緒に考え対応してくれると思いますか」については、保護者の95・7%、生徒の92・9%が肯定的解答であった。これらの評価が今後とも本校生徒指導にとっての重要な指標であり、これらの評価の低下は、後追いの生徒指導の増加を意味すると考えている。

自己の肯定、有用感の醸成、また一人一人への丁寧な進路保障に向けた取組が、生徒たちの荒れをとどまらせる最良の道であると信じ、今後も地道に努力を続けていきたい。

（校長 阿部 哲哉）



1 はじめに

高梁中学校は、「瞳輝く学校」を目指しています。生徒指導上困難な時期もありましたが、多くの方々の支えによって、落ち着いた学習環境が整いつつあります。

これまでの主な取組と、指導の重点について紹介させていただきます。

2 主な取組

(1) 「凡事徹底」

鍵山秀三郎氏（日本を美しくする会）の考え方を参考に、「当たり前」のことが当たり前でできる」ことを目指しています。

「自転車をそろえて止める」「靴をそろえる」「雑巾をきれいに掛ける」など、小さなことの積み重ねを大切にしています。

① 凡事徹底は教職員から

校長が、全校生徒の前で「凡事徹底」の状況を誉めます。その後学年集会では、学年主任等が取組の評価をします。そして、学級担任



トイレのスリッパをそろえる

がクラスの実態に合わせて話をします。

全職員が共通理解をし、それぞれの立場や場面で指導することで、効果が上がりつつあります。

また、教職員は、「授業開始以前に教室に行く」「部活動指導は全員で行い、下校指導まで確実に行う」など、生徒と共に日々の積み重ねを大切にしています。

② あきらめない

トイレにスリッパがあります。きれいに揃わないことが続き、使用をやめることが検討されました。その結果、「できないから止める」のではなく、「できるまでやる」ことを選びました。時間はかかりましたが、現在は、他のスリッパまでそろえる生徒が増えています。

(2) 生徒会活動

生徒会活動を、生徒力育成と学校活性化の核と位置づけ、「自治活動の充実」を目指しています。

すべての委員会でコンクール活動を行っています。また、自主ボランティア活動「クリーン友の会」が活発化しています。



クラスTシャツを着用した歌声大会の様子

○ 歌声大会

「歌の力で学校を盛り上げたい。」という生徒会の熱い思いにより、平成25年度より全校歌声大会を行っています。平成26年度には、生徒制作の「応援歌」が完成しました。

大会当日、各クラスごとのカラーTシャツを着た生徒たちの、大合唱が体育館にこだましました。

(3) 協同学習

協同学習を通して、学習意欲の向上を目指した「わかる」授業の実現を目指しています。

教員の授業スタイルや個性を活かしながら、すべての教科・学年で協同学習を実施しています。学校全体で取り組むことで、研究主題「共に支え合い学び合い高め合う生徒の育成」に迫ろうと努力しています。

3 「組織力」と「改革意欲」

学校行事への意欲的な取組、ボランティア活動の充実、部活動での活躍など、生徒のがんばる姿が増えてきました。

学校は、組織力の向上や、改革への努力を続けなければ、生徒の成長の手助けはできません。

「凡事徹底」を合い言葉に、今後とも努力したいと思えます。

(前年度校長 吉川 昭)